

二・二六事件とラジオ

島浦清二 司会／NHK大阪放送局アナウンサーを経てジャカルタ放送局放送部長、大阪放送局長、編成局長を歴任。

石橋恒喜 放送番組向上委員会幹事／事件当時は東京日日新聞記者で陸軍省記者クラブ員。

大久保弘一 元陸軍省新聞班員、「つわもの」編集長／当時少佐で「兵に告ぐ」を執筆した。

宝田通元 元NHK企画部長／当時ニュース課長として放送はじめての自主取材・報道を指揮。

中村 茂 元NHK放送文化研究所長／当時の名アナウンサーで「兵に告ぐ」を放送した。

新聞敗れたり

島浦 二・二六事件（一九三六年）は事件そのものや背景、あるいはその影響など、いろいろな話もございしますが、今回は特に放送と結びつけて考えたいと思います。放送、ことに報道放送にとってはあの事件は非常に大きなきっかけだった。ニュース放送というものの価値を高からしめたということはいえるわけでしょう。

宝田 あの放送は、全国で一番聞かれた放送じゃないかな。あの時は東京の電話は全部とめられていたし放送でなければ、東京の状態が全然わからなかったんです。

島浦 私は偶然ですけども、前の晩、大阪で泊りだったんですよ。朝起きしましたが、東京からいつも流れてくる放送が流れてこないんです。どこかで故障しているのか、全然わからないので驚きまして、東京へ電話

し、大事件らしいということ、あわててBK(JOBK 大阪放送局)の幹部のところへ電話した。AK(JOAK 東京放送局)にも通信省からの禁止事項が来、それで初めて知ったわけですね。山本照アナウンサーが前の日の泊りで、ラジオ体操の江木理一アナウンサーが来ていてその人たちが連絡したんでしよう。

宝田 そうです。

石橋 結論みたいですが速報性の上で新聞敗れたりということを感じたのは、二八日になってからですね。われわれは戒厳司令部記者クラブにおるわけですが、デスクから電話がかかってきたんです。「一体、きみたちはそこにたくさん詰めておって、何をしているんだ」「何をしているとは何だ」「とにかくラジオを聞け、きみ。刻々といういろいろなニュースを流しているじゃないか。ところがきみのクラブからは何もこない」というんだ。

ちょっと弱りましたな。それでスポークスマンの松村秀逸少佐に「新聞班けしからんぞ。われわれクラブに對して何も出さん。ラジオにだけニュースを配っておるなんてあんな馬鹿なことはないじゃないか」。そうしたら松村は「いまは平時と思うかつ、きさま」(笑)。腰の小さな拳銃に手を触れながら、「いまは戦時なんだぞ」というんですよ。

あの時に、これはやはり速報性においては新聞は放送にはとてもかなわんなと思いましたよ。われわれが出すとなると、電話で本社に吹っ込む。工場へ行って活字を組む。号外を出す。あとは全国で配達と同じような行程を経るわけでしょう。

ラジオはなるほどあそこの戒厳司令部の中に放送室がありましたな。そこで書いたやつをすぐ放送する。それはもう太刀打ちできません。ことに刻々情勢が変化していくわけですから、新聞に頼っておれんわけです。

あれでもうほんとうに速報性において「われ敗れたり」ということを痛切に感じましたね。

大久保 それまで放送ということは、ちっとも考えなかつたんですよ。一九九日の朝になってから帰順勧告にラジオを使おうというプランがでてきたんですよ。

島浦 二八日に戒嚴司令部に大体機械は入っている。そこで実際には、その日の夜九時何分(五〇分)かに戒嚴司令部の何か発表をやったんですね。その時に反乱軍と初めて呼んだ放送をやっています。

放送局は初めての自主取材をやっているんです。局員が、ほうぼうへ行つて状況を見ては帰ってくる。放送局は各クラブに記者というのはいないんですから、素朴だけれども、自主取材の初めだと思いますが、どうですか。

宝田 放送局としては総合的な自主取材の初めです。各方面からデスクへ情報を集めて原稿をこしらえたのは、あれが初めてです。

島浦 その時に宝田さんの命令で軍人会館(現在の九段会館)^②の警備司令部へも、警視庁は錦町署へ移つたからそつちへも行っていいでしょう。

そついうのはいいんですが、NHKの報道の記者諸君が、同盟通信③へ行つたり、電報通信社④へ取材に行つていいんですよ。その当時のことがわかるような気がする。

宝田 同盟だの、電通だのというのは、案外取材ができなかつたんですよ。

島浦 二六日にいろいろ臨時ニュースもやっておりますが、お昼のニュースというのが、取引所が休んでいるとか、手形交換所がどうだとか、日銀だの、三井銀行だとかが平常どおり業務をしておるといふニュースしかないんですからわからないんですよ。

中村 取引所が休むということで、大きな事件があったということ想像する以外にないんですからね。
島浦 経済市況の時間毎に、取引所が休んでおるから、経済市況の放送はないというアナウンスしか出てこないんだ。

初めて夜七時の定時ニュースの時に、警備司令部の発表として、官庁公示事項ということで、戦時警備令が初めて出た。しかしこの時には事件内容はわからないんですよ。八時三三分の臨時ニュースで初めて、岡田首相以下を襲撃というのが出てきたわけですね。

石橋 九段の借行社(陸軍の将校クラブ、一八七七年創立)の玄関先で初めて八時三五分にですか、例の決起行動があったという発表をやったんですが、それがわれわれの送った最初のニュースですよ。それで第一日は終わりですね。

中村 一般には「決起部隊」だけれども、反乱軍部隊と言ったのはあとだね。

註

- (1) 主に郵政と通信を取扱う省。一九四九年郵政省と電気通信省とに分かれて廃止された。さらに郵政省は、二〇〇一年総務省になった。
- (2) 二〇一一年三月二一日の東日本大震災による天井の一部が崩落し、死傷者をだしたことから、同年四月二二日廃業。取壊しが決定。
- (3) 一九三六年一月、日本電報通信社(電通)の通信部門と新聞聯合社が合併して、同盟通信社が誕生した。
- (4) 一九〇一年創立の日本電報通信社のこと。一九三六年同盟通信社に通信部門が合併されるに伴い「電通」として広告代理業專業となった。

(5) 岡田啓介首相、鈴木實太郎侍従長、斉藤実内大臣、高橋是清蔵相、牧野顕前内相が襲撃され、斉藤実と高橋是清、教育総監渡辺錠太郎が殺害された。

気配はわかった

島浦 たまたま前の晩から大雪で、東京市民も朝、何も知らずに普通に出てきて非常警戒に引っかかって何があったんだということのようですね。太平洋戦争開戦(一九四一年二月八日)の時よりもこの四日間の東京のほうが、放送番組の入れかえが激しいんですよ。一月八日というのはわりあい変えていないですね。臨時ニュース以外は大体予定どおりやっています。夜になって変わっていますけれども、これは朝から経済市況が休んだりするから変えざるを得ないんですけれども、ほとんど番組を変えていますね。地元だからね。

石橋 二六日の午後七時に東京警備司令部が第一回の発表として、「本日午後三時第一師団管下に戦時警備令が下令された」というようなニュースを出している。事件の内容についてはそれから間もなく、午後八時一分に陸軍省発表で、「本日、午前五時ごろに、一部青年将校(反乱部隊一四八三人)」などが、左記個所を襲撃せり」というのをやりました。「これらの将校らの決起せる目的は、その趣意書によれば、内外重大危急の際、元老、重臣、財閥(軍閥)、官僚、政党等の国体破壊の元凶を^{さんじよ}芟除(除き去る)し、もって大義をただし、国体を擁護せんとするにあり。右に關し東京部隊に非常警備の処置を講せしめられたり」という発表が、事件の内容に關しては第一回の発表ですね。

島浦 決起部隊の理由などを詳しく書きましたね。

石橋 ①ただ決起趣意書には軍閥というのが書いてあって、陸軍省発表では軍閥をぬいて、財閥というのが

くつつけてあります。

海軍省も発表していますね。「第一艦隊、第二艦隊は、東京湾及び大阪湾警備のために出航を命ぜられ、それぞれ二七日入港の予定なり」というようなのを、やっていますね。

島浦 石橋さんのお書きになったものを見ますと、山口（一太）大尉というのが出てきますね。それで石橋さんは前の晩から決起することをご存じだった……。

石橋 あのころは、ほとんどわかっておりましたな。

島浦 大久保さんたちの軍の中でも、大体の気配はわかっていたんですか。

大久保 ええ、気配だけはね。

石橋 ぼくは当時、相沢公判（相沢）（三郎）中佐が永田（鉄山）軍務局長を刺殺した事件（一九三五年八月二二日）を担当しておったんです。二五日には真崎前教育總監が出廷し、同時に秘密裁判になってわれわれも出されちゃったんです。開廷して真崎大将がしゃべるのかと思ったら、一〇分ぐらいたったと思ったら法廷から出てきちゃった。一体、何があったかさっぱりわからんわけです。

それでその後、赤坂の歩兵一連隊の前にいた、民間人として無期（二・二六事件に關与した件で無期禁固になった）になった亀川哲也のところへ行った。めしを食っていけやというわけで、二人で食べておったんですよ。そのうちに西田税（死刑）が和服で、久留米（くるめがすり）餅か何かを着まして、いつもいかに髭（ひげ）がありました。その髭（ひげ）を剃っていましたね。

亀川に「事態はいよいよ迫った。連中はいくら止める、止めると言ったって、止めそうもない。みんな衛門の前の竜土軒（かつて東京都麻布龍土町の歩兵第一連隊前にあった明治時代開業の西洋料理店）へ集まっておる」という。そしてぼくを見て、「どうです、行って連中の話を聞きますせんか」なんていうから、いやぼくは社に用があるからと言って帰ろうとしたところ、免官

になっていた村中(孝次)大尉が軍服を着てやってきましたよ。その時に亀川が、お前たち金を持っておるかと言ったというんです。「いや、金なんか要らん」「金を要らんわけがないじゃないか」。「いや、日本銀行を占領すればいい」(笑)といったそうだ。村中の来るのと入れ違いに社に帰ったんです。まさか、あんなでかいことをやるとは思わなかった。社に帰って、「あいつら、あしたの朝何かやるぜ」といっても、本気にされないんだ。

大久保 勃発するその日まで、われわれは知らなかったんですよ。普通に出勤しておりました。軍人会館へ行けということで軍人会館の中の借行社へ集合した。だから軍刀やピストルを取りに帰宅したのもいた。ぼくはサーベルで通したんだが……。

島浦 翌日の二七日になりまして、片方では戒厳令が出て、いわゆる反乱決起部隊は山王ホテル、幸楽(千代田区永田町の料亭)へ行っていますね。

石橋 大体決起したのが二六日の午前五時ですね。それで例の軍事参議官が宮中に集まって、陸軍大臣告示と③いうのを各決起部隊のところへ持って行って読み上げた。その中に、お前たちの決起の趣旨は「天聴(天皇が聴く)」に達したり」というふうなことを言ったわけです。だから連中もわれわれの精神は陛下に認められたんだと、意気軒昂(けんこう)たるものだったんです。しかも、その日に戦時警備令が第一師団管下に出て、あそこら辺におった決起部隊は歩兵第一連隊長指揮下に入って麹町地区の警備をしるという命令を受けている。そうするといわゆる反乱軍でも何でもないわけです。翌日戒厳司令官になったのは、同志の香椎(平浩)③中将である。皇道派ですからね。

二八日になってまた雪が降ってきましたな。そして形勢が逆転してきて、連中に対する風当たりが非常に強

くなつてきて、例の夜の戒嚴司令部の発表では、決起部隊から騷擾部隊という名前に変わっていますね。そして、日比谷付近の住民はみんな避難しろという第一回目の命令(二十九日午前八時三五分発表、ただちにNHKが放送)が出た。

註

(1)

蹶起趣意書

(昭和十一年二月二十六日)

謹んで 惟るに我が神州たる所以は万世一系たる天皇陛下御統帥の下に拳国一体生成化育を遂げ遂に八紘一宇を完つするの国体に存す。此の国体の尊嚴秀絶は天祖肇国神武建国より明治維新を経て益々体制を整へ今や方に万邦に向つて開頭進展を遂ぐべきの秋なり。

然るに頃来遂に不逞凶悪の徒簇出して私心我慾を恣にし至尊絶対の尊嚴を藐視し僭上之れ働き万民の生成化育を阻碍して塗炭の痛苦を呻吟せしめ随つて外侮外患日を逐つて激化する。所謂元老、重臣、軍閥、財閥、官僚、政党等は此の国体破壊の元兇なり。倫敦軍縮条約、並に教育總監更迭に於ける統帥權干犯至尊兵馬大權の僭窃を図りたる三月事件、或は学匪共匪大逆教団等の利害相結んで陰謀至らざるなき等は最も著しき事例にして、その滔天の罪悪は流血憤怒真に譬へ難き所なり。中岡、佐郷屋、血盟団の先駆捨身、五・一五事件の憤騰、相沢中佐の閃発となる寔に故なきに非ず、而も幾度か頸血を濺ぎ来つて今尚些かも懺悔反省なく然も依然として私権自慾に居つて苟且偷安を事とせり。露、支、英、米との間一触即発して祖宗遺垂の此の神州を一擲破滅に墮らしむる、火を見るより明かなり。内外真に重大危急今にして国体破壊の不義不臣を誅戮し稜威を遮り御維新を阻止し来れる奸賊を爰除するに非ずして皇謨を一空せん。

恰も第一師団出動の天命渙発せられ年来御維新翼賛を誓ひ殉死捨身の奉公を期し来りし帝都衛戍の我等同志は、将

に万里征途に登らんとして而も省みて内の亡状憂心転々禁ずる能はず。君側の奸臣軍賊を斬除して彼の中枢を粉碎するは我等の任として能くすべし。

臣子たり股肱たるの絶対道を今にして尽さずんば破滅沈淪を翻すに由なし、茲に同憂同志機を一にして蹶起し奸賊を誅滅して大義を正し国体の擁護開顕に肝腦を竭し以つて神州赤子の微衷を献ぜんとす。

皇祖皇宗の神靈、冀くば照覽冥助を垂れ給はんことを。

(2) 北一輝と親交のあった軍人。二・二六事件の首謀者の一人として逮捕され、翌一九三七年銃殺刑に処せられた。

(3) 一、蹶起ノ趣旨ニ就テ八天聴ニ達セラレアリ。

二、諸子ノ行動八国体顕現ノ至情ニ基クモノト認ム。

三、国体ノ真姿顕現ノ現況(弊風ヲモ含ム)ニ就テ八恐懼ニ堪ヘス。

四、各軍事参議官モ一致シテ右ノ趣旨ニヨリ邁進スルコトヲ申合セタリ。

五、之以外ハ一ツニ大御心ニ俟ツ。

(4) 旧陸軍内部の一派。天皇中心の国体至上主義を信奉。直接行動による国家改造を企て二・二六事件を起こすが失敗し、一掃された。

「放送局占領」に拍手

中村 とにかく国民は一体に同情的だったんですな。あの頃は汚職はあいついで起こるし、東北、北海道は冷害がひどくって娘さんを売ったりしていた。世の中は絶望的だったでしょう。そこへ決起して、財閥・軍閥や政界の腐敗を浄化するというんだからね。同情する閣下もおられたでしょう。

石橋 二八日の夕方には、幸楽の前に安藤中隊が雪を固めて演壇をこしらえて、その上に少尉なんかの連中が立ちあがって「現状はどうだ、われわれ庶民は塗炭とたんの苦しみ泥にまみれ火に焼かれるような極めて苦痛な境遇」を舐なめているじゃないか。この際われわれは重臣・財閥・軍閥などを倒して昭和維新を敢行しなければならん」というような演説をやっている。そうするとあの辺を取り巻いている連中が「やれやれ」とか「昭和維新万歳」などと同調している。この中隊は下町のあるちゃん連中なので人気があったんですね。

島浦 演説で「放送局占領」と言ったら、みんな拍手喝采かっさいしたそうですね。その演説を放送でやれというんだ。それをだれか聞いていて、あわてて愛宕山当時NHK東京放送局は東京都港区の愛宕山にあったへ駆けつけて、大変だいうんで、それで警備がはじまったんですね。

宝田 そうです。戒厳司令部へ連絡して騎兵第一連隊がきました。その前、二八日に放送局の中山竜次業務局長が戒厳司令部へ行き作間少佐と話して、軍の発表は重大問題だから、どうしてもアナウンサーがやらなければだめだということを申し入れていきますね。

石橋 あれはいいことだったな。

島浦 たいへんな見識だったと思うんですよ。放送局側からいえばね。そうなって中村さんが戒厳司令部へ連れて行かれるわけでしょう。二八日の午前中に機械据えつけのほうは終わっています。

中村 松隈君（アナウンサー）が先に行って、成沢報道部長がかわれというんで、成沢さんとぼくで戒厳司令部へ、マイクホンが着いた二八日の昼ごろ行っただけです。

島浦 午前一一時ごろに完了したその後、中村さんが行ったわけですね。それから「兵に告ぐ」までだいぶ間があるんだよ。

中村 二九日だからね。ただどんな材料があっても放送するわけにいかないんだ。山（愛宕山のこと）からはニュースは出ていたが、新聞社にも発表はなかったんでしよう。

石橋 ほとんど発表はないです。ラジオを聞いて号外なんかを出していた。

中村 愛宕山から戒嚴司令部へは、ふつうは宮城（きやうじやう）（皇）前を通れば一〇分かそこらでしょう。それが行けないんですよ。山の手のほうから避難民がどんどんくるし、警視庁は反乱軍がいるし、雪で道も自動車がやっ通れるくらいでした。それで新橋から、昭和通りへ出て、万世橋から戒嚴司令部へ行ったので、一時間半ぐらいかかった。交通も途絶状態でした。

島浦 撃ち合いをするという時、山手線を全部止めたり、その辺の市電も全部止まっていますね。

石橋 東海道も品川で折り返しだ。

中村 危険だから畳の下へかくれるとか、音のする反対側にいるとか、そういう時には何かやるんじゃないかと、ちょっと緊張したね。

島浦 丸の内のこの辺を中心にしたところを背にして、たんす箆笥の陰にかくれるとか……。

大久保 二・二六事件の中では、中枢部が動揺させられたことが一度だけあったんです。それは事件発生後三日目、二八日の夜で、反乱軍がちつとも帰順して来ない。しかたなく奉勅命令を仰いで、二九日午前九時を期して攻撃開始だ。在京部隊では足りないから水戸や宇都宮、甲府、仙台まで集め、戒嚴司令官下につけたわけです。

ところが、「歩兵第三連隊（の残留部隊が反乱軍に投じた」とか「市内各所で暴動が起こりつつある」などとデマがとぶ。これで司令部は動揺したんです。もし反徒が足もとから蜂起すれば、司令部は修羅場になってい

たでしような。それで鎮庄どころか暴動になっていたかも知れない。

石橋 そんな雰囲ふんいき気があつて、結局刻々住民に事実を知らせるためにも、大いにラジオを活用したという結果になったんでしような。「兵に告ぐ」を書きとばす

島浦 二八日から、だんだんとさっきのお話のように形勢が変わってきて反乱軍になっちゃって、二九日には一般の講演とか演芸はむろんやめて、ともかく臨時ニュースを夕方まで頻ひんぱん繁にやっただです。最後に終わったのは夜になってからだ。

「兵に告ぐ」というのを初めてやったのは、朝の八時四八分と記録に残っているが、そこで復唱三回。

大久保 たまたま私は熱があつたうえ、三日も眠っていない。頭を冷そうとぶらっと外へ出て九段坂を上って行ったとき、ハッと気がついたことがあつたんです。借行社の別館に、事件以来、責任ある大將が八人缶詰かんづめになつていた。私はその中にとび込んで、「戒嚴司令部の大久保少佐であります」と名のって攻撃開始を閣下方かたから司令官に延期してもらつてくれ、と頼んだんです。私の頭では、飛行機と戦車を利用して兵に対するビラをまいて、と説明して、了承をつけた。午前中待とうということとです。それで夜明けまでの数時間に、準備して、同僚三名と協力してビラビラの原稿を書き、『朝日』の記者にたのんで三万枚を朝六時までに刷ってもらい、立川の飛行場に戦闘機三機の手配をしたんです。

ただ申訳ないが、その時にまだラジオのことが浮かばなかった。



〈兵に告ぐ〉 二・二六事件の際、大久保少佐が執筆、中村アナが放送した原稿

中村 それまでには将校にばかり勧告をしていた。それを直接兵隊に呼びかけようというわけですね。大久保 ええ。ところがピラをまいても大部分は風にとつて宮城きやうじやきうの方へ流れちゃった。戦車の効果もわからない。もはや万策つきた、と思っていたら麻布連隊の司令官がとんできた。朝の八時半頃です。反乱軍の家族が四、五百人、連隊へつめかけて息子たちをどうしてくれるとどなっているというんです。市民の暴動おもちになりかねないんだ。戒厳司令部は何しているんだ、とドナリ込んできた。私の上官の根本大佐が深刻な面持おももちで聞いていましたよ。根本大佐が何か感じて「大久保はおるか」。私がそばへとんでゆくと「君、すぐにラジオ放送をしよう。反乱軍はラジオを聴いておるらしいから帰順勧告の放送をしよう。すぐやってくれ」と言われた。書きとばしですよ。



〔参考〕 ライツ型マイクロフォン

中村 放送室といったって、軍人会館の映写室で、そこへ電話や放送の線が引いてあったり、マイクが立ててあったりする。映写機もそのままだ。そのうえ人が多いでしょう。そこで大久保さんが書かれた。

島浦 小説なんかの挿絵だと机があつてスタンドマイクだけれど……。

宝田 立ちマイクでライツ型①ですよ。

中村 陸軍省の便箋びんせんに、こまかいペン字で二枚だった。

大久保 二枚です。いまその原稿は放送博物館にありますね。

島浦 われわれ一般に「兵に告ぐ」といいますが、「下士官、兵に告ぐ」というのがありますね。それをピラでまかれた。それは個条書き②のようなものです。

大久保 三力条②ばかり簡単に書いたんです。あれはわれわれが分担して書いたんですが、前の二八日の午後

「一時半ごろ、私を盛んに呼んで探しておるんですよ。私は熱があって憲兵司令部の三階に避難しておったんです。そうしたら呼んでいるからこいというわけで行き、そこで兵隊に対する勧告文を書いた。

翌日は、きのう書いたような内容を放送してくれと言われて「兵に告ぐ」^③を書いたんです。

島浦 それで「いまからでも決して遅くはない」が両方へ出てくるわけですね。

宝田 「いまからでも遅くはない」というのは、殺し文句だと思うね（笑）。ずい分はやったよ。

註

① 一九二五年ドイツのオルゲン・ライツ博士によって考案された炭素マイクロフォン。大理石の窪みにカーボン粒を充たし、振動板には薄いマイカ（雲母）などが用いられている。

② 一、今からでも遅くないから原隊へ帰れ。

二、抵抗する者は全部逆賊であるから射殺する。

三、お前たちの父母兄弟は国賊となるので皆泣いておるぞ。

③ 戒嚴司令部發表

「兵に告ぐ」

敕命ちよくめいが發せられたのである。

既に天皇陛下の御命令が發せられたのである。

お前達は上官の命令を正しいものと信じて絶対服従をして、誠心誠意活動して來たのであろうが、《お前達の上官のした行爲は間違つてゐたのである。》

既に《救命》天皇陛下の御命令によつてお前達は皆原隊に復歸せよと仰せられたのである。

此上お前達が飽くまでも抵抗したならば、それは救命ちよくめいに反抗することとなり逆賊とならなければならぬ。

正しいことをしてゐると信じてゐたのに、それが間違つて居つたと知つたならば、徒らに今迄の行が、りや、義理上からいつまでも反抗的態度をとつて天皇陛下にそむき奉り、逆賊としての汚名を永久に受ける様なことがあつてはならない。

今からでも決して遅くはないから直ちに抵抗をやめて軍旗の下に復歸する様にせよ。

そうしたら今迄の罪も許されるのである。

お前達の父兄は勿論もちろんのこと、国民全体もそれを心から祈つてゐるのである。

速かに現在の位置を棄て、歸つて來い。

戒嚴司令官 香椎中將

(註) 《》部分は放送に当たつて削除された。

装甲車に拡声機をつんで

石橋 大久保さんは当時陸軍省新聞班で『つわもの』という新聞の編集長をやつておられたから、新聞記者的センスがあつたわけですね。

島浦 『つわもの』というのは下士官、兵が読むんですね。中村さんは二月八日の宣戦の詔勅(米國及英國二對スル宣戰ノ詔書)もそつだつただけ、そついうものを初見で読むのは名人でしたね。

ところで読んでいてどうでしたか。

中村 「天皇陛下の御命令によってお前達は……」あたりで声がふるえて来たのをおぼえていますよ。下読みはサツとしたことはしたんですが、その時にもう目頭が熱くなって、眼鏡が曇っちゃってね。読んだあとはマイクの前にうつ伏しちゃった。

大久保 さすがに中村さんは名調子でしたね。ぼくも感激の涙がこみ上げてしようがなかった。人事は尽し終った、と思ったんです。あとは、この放送が兵隊に聞いてもらえるように、それだけでした。

中村 日本人でこの気持がわからない者はない、と思ったな。

石橋 八時何分(四二)分にラジオで「兵に告ぐ」をやる。それからアドバルーンを飛行館の上にあげましたな。さらに戦車には幕を張りめぐらしてね。

中村 やはり幕を張った装甲自動車に、放送局の友安課員が松井少佐と乗っていきましたね。ラジオをはたして聞いているかどうかから……。

宝田 それで警視庁に向けて、あそこら辺一帯に聞こえるように大拡声機をつけてやった。いつ撃たれるかわからんというんで、悲壮な覚悟で物影にかくれてやったということを行いました。幸楽へは日枝神社のところに拡声機をつけたんだ。

石橋 この「兵に告ぐ」をラジオでガンガンやる(午前一時全国放送で流された)。それから戦車でやる。飛行機でピラをまくということ、これで動揺が起こったわけですね。

大久保 反乱軍から真先に帰順してきたのは、九時半ですよ。ほんとうに効果が早かった。

石橋 二九日の一〇時一五分に戒厳司令部が発表しましたね。「下士官以下、三〇名が帰順した」と第一回に発表しているんですよ。だから放送から間もなくですな。

中村 最後まで降伏しなかったのは安藤中隊ですな。幸楽のね。

島浦 あのあとで将校の中の一人である村中さんという人の書いた反省手記を読んだんですが、放送局を占領しなかったことが決定的な間違이었다というんです。ほかのこともそうだけれども、あの時に放送局へワーツときてやられねばね。放送局の中山業務局長が宝田さんが、一番初めに局員を取材に出す時に、「もし命があぶないと思ったら部署を離れてもいい」ということを言い渡しておられますよ。

「罪は許される」が問題

島浦 近ごろは全部そうですが、新しい国のクーデターなんていうと、まず放送局を占領していますね。二・二六事件の知恵じゃないかと思うんだ。新聞社へ行ったのはどういっわけでしょう。

石橋 新聞社があの前年の真崎教育總監の首切りに同調したというんです。前の年に陸軍と記者クラブで潮来^{いたこ}へ行って懇親会をした。そのとき首切りの相談をしたという怪文書が出ているんです。それであいつらけしからんぞというのと、それと同時に決起趣意書を新聞の号外か何かで出させようということですね。栗原^{秀泰}（中尉が総理官邸から出ようとしているところへ、山口一太郎大尉が、連絡に総理官邸にかけつけてきたんです。来たら、栗原、中橋なんかがトラックに乗って出勤しようとしている。「これからひとつ、『朝日』や『東日』^{『東京日日新聞』、今の毎日新聞の前身}）へ行って連中に思い知らせてきます」「手荒なことはやるなよ。新聞をやったってしょうがないじゃないか」「承知しました」とか言って出て行って、それで『朝日』へ行って活字ケースをひっくり返して、それ以上の乱暴はやらなかったんですな。それから『東日』と『報知』^{『郵便報知新聞』として発足。一九四二年『読売新聞』と合併}）が当時並んでおりましたから、「だれか代表出る」というので表へ出て、決起趣意書を渡して、「これを印刷し

て配れ」ということで引きあげてしまったわけです。読売新聞にだけあの時寄らなかつた。当時は、微々たる存在だったんでしょね。正力社長は「おれのところへなぜこない」と言ったそつだ（笑）。

島浦 大久保さんは文章を前にご勉強なさったんですか。

大久保 （微笑）。

石橋 当時、新聞班には名文家がそろっておったんですよ。

宝田 非常に心をつかむものがあつた。命令的な文章だったら聞かないですよ。

大久保 あとで、ずいぶん反対がありましたよ。非常にやられたです。

中村 「お前たちの罪は許されるのである」というので問題が起こつたんですね。

大久保 陸軍刑法違反ですね。独断専行が強すぎると言つて……。書いて放送してもらつ段階ではだれの指図も受けていませんからね。

およそ司令官の名で外に出すのは、大小にかかわらず主任参謀から参謀長や司令官のハンコを一〇ちかくとつて出るんです。それを全然やっていないんだ。それと文句に情愛がこもつて女々しいめめというんですよ。

宝田 戒厳司令官が出すものだから、もっと峻烈な莊重なものであるべきだというわけですね。

大久保 ええ。あのときは、ぼくに対する非難がたくさんあつたものだから、山下奉文將軍がやってきて、「あれでいいんだよ。あれでなくちゃいけないんだよ」と、なぐさめてくれましたよ。

島浦 軍隊的な文章じゃないところだと思つんですが、そういうところが後世に残つたんですよ。

宝田 告諭第何号じゃ残らん。

中村 あれはこの発表かわからないですね。いきなり「兵に告ぐ」だものね。それでまず「戒厳司令部発

表」を二回やっただんです。戒厳司令部というところ、まわりの人がラジオをとり囲むんですよ。その余裕をもたせるために言ったんです。

島浦 新聞班というのは、後の報道部になるわけでしょう。

石橋 ええ、あれは軍事調査委員長が報道部長にあたる。これが大東亜戦争になって、大本営なんていうころになって、報道部となったわけです。

島浦 そのあとでは報道部長が新聞よりも、ラジオで大演説をすることのほうが、多くなったようですね。

真空管持って逃げる

石橋 二八日の夜中にぼくが戒厳司令部におったら、松村少佐がおりてきまして、「お前たち、ここから立ちのけ」というんです。

真夜中ですよ。何だろうと思ったら、「反乱軍に同調するものと、反乱軍を討伐するものと、司令部の中は二派にわかれているので、これから撃ち合いになる。お前たち、うっかりするとばっちりがかかる。立ちのけ」という。

中村 戒厳司令部の参謀は三階にいたんでしょ。呉越同舟でしょう。反乱軍に加担している将校もまだはつきりしないから廊下をブラブラ歩いている。

石橋 ぼくは社へ帰って連絡して、また戻ったな。

宝田 第一、放送局を初め守ってくれた騎兵連隊は、ぼくが陸軍省へ行つて、「この部隊に守ってもらってありがとう」と言ったら、「あの部隊はあぶないんだよ。騎兵部隊じゃ、あんな小さな鉄砲で反乱軍と戦争は

できないよ」というので、急いで甲州の歩兵の部隊とすぐ交代してもらいました。

そのかわりスタジオなんかをみんな占拠されちゃって、銃眼をあけますからというんだ。防音設備、技術部が一生懸命になっているところへ、みんな穴をあけられては、これは困ると思ってかんべんしてくださいと言っているうちに済んだんだけど……。

島浦 軍人会館の場合は一つの現場として、報道者の使命というものがあると思うんですよ。愛宕山へきて銃を突きつけられて、おれがいまから放送するからお前やれといわれたら、まあそれまでかな。

宝田 あの時、来たら真空管を持って逃げちゃおうということだったんです（笑）。

石橋 新聞は、反乱軍に対する抵抗として、例の決起趣意書を栗原中尉が持ってきて、これを載せよと言ったんですが、どこも載せなかった。

記事さしとめが出ておるからやらなかったせいもありますかね。『報知新聞』は載せたんですが、削ってある。ただゼスチュアを示した。

宝田 海外に対する通信連絡をあの時に軍でとめましたね。写真撮影もとめるし、あらゆるものをとめちゃったから、海外へ行かないはずだけれども、どういう方法か、やっぱりいつているんです。

島浦 ハワイの『日布』（ハワイは漢字で布哇）時事』も、NHKの放送を聞いて、その放送のほうを重く書いたというよな記録がありますね。

もう一つ、二・二六事件と放送の因縁ばなしみたいなものですが、代々木の衛戍監獄（えいじゆ）で、反乱軍将校の死刑の執行（七月二日）があったでしょう。あれが今の放送センターと、渋谷公会堂のある坂のところですよ。

- 『放送夜話 座談会による放送史』（日本放送協会編集、一九六八年、日本放送出版協会）所収。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために、二種類の註をつけた。本文中の割注は比較的短い註に、節末の註はやや長い註とした。

- PDF化には L^AT_EX 2_ε でタイプセッティングを行い、dvi_{ps}dmx を使用した。

ラジオ関係の古典的な書籍及び雑誌のいくつかを

ラジオ温故知新

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/>

に

ラジオの回路図を

ラジオ回路図博物館

<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/radio/radio-circuit.html>

に収録してある。参考にしてほしい。